
power of school!!

海原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

power of school!!

【コード】

N9694C

【作者名】

海原

【あらすじ】

キサラギズタカ リヨウは学校に忘れ物を取りに行く。教室にいたのは惑星から来た少女で……。SF学園ファンタジー物です。

ブローグ

ブローグ

たまたま、偶然、丁度良い。などのその場に合った好都合というのは決して人に対して向ける矛先では無い。ましてや、そのたまたまや偶然を個人で押しとどまらずにかなりの範囲に向けるのもどうにかしていると思う。

飲みかけの清涼飲料水を見て如月涼高キサラギスタカはそう考えた。清涼飲料水を見ると無償に腹ただしくなってしまう缶蹴りのように何処かへ放つてしまったかった。如月涼高には清涼飲料水に本当に嫌な思い出があった。

スタカと言う名から一部を取り小学校まではスズと呼ばれていた。だが、ある日幼なじみが清涼飲料水を飲んだことが 清涼飲料水のラベルを何気なくみたことでスタカのあだ名はスズからリョウとなった。清涼飲料水の涼をとってリョウ。無理強いなあだ名だった。それは幼なじみ個人から呼ばれるなら良かったが幼なじみが色々な人の回りで呼び始めた。それは幼なじみが人気だったからということもある。中学二年生になった今、スズやスタカと呼んでくれるのは一部の友人か家族だけになってしまった。

たまたまと偶然からして、キサラギスタカのあだ名はリョウとなった。

プロローグ（後書き）

と言うわけで、どんなわけか分かりませんが、書かせていただくことにします。前のペンネームでこれを連載していましたがまともプロットをたてずに断念。プロットを立て直して連載を開始させていただきます。

感想や評価は続くにつれての励ましになるのでもしなにかありましたらどうぞ。手厳しい評価もお待ちしております。

第一章 前

兄弟や姉妹というのは、特に弟や妹という立場では兄弟というのはとても嫌なものだとリヨウは考える。洋服はお下がり、学校の道具もお下がり、なにもかもほとんどがお下がりなのは当たり前で、兄や姉は嫌悪の固まりだと思う。

喧嘩をすれば兄や姉の立場が不利になるが、それは小さな時だけでお下がりというリサイクルと金の節約は自分が独り立ち出来るまで半永久的に続くことになるし、上目線の見下し攻撃だつて半永久的に受け続けなければならない。

口喧嘩でもおそらく負けるだろうし武力行使に出たとしても正固めを喰らわされて暗転してしまうだろう。

何故、キサラギスタカがリヨウというあだ名が嫌いなのか、それは簡単なことで兄の名前と被っているからだ。

キサラギリヨウタカ
如月涼太。

二つ上の兄。そしてリヨウタカも一部の友達にリヨウと呼ばれていた。そのあだ名がリヨウタカの耳に届いたときにリヨウタカは兄弟みたいで良いじゃないか、と言った。勿論、兄嫌いなスタカは嫌悪している。

「なあ、スタカ」

月の光が差し込んでくる中、居間のソファに腰をかけてテレビを見ていたリヨウタカが、ソファの背もたれから首を投げ出して首を逆さまにした状態で食事を使うテーブルでゲームをしていたリヨウに声をかけた。ゲームから顔を上げずにリヨウはなに、と反応した。

「出ないな。ニュースに」

「……ああ、あれね」

ゲームから顔を上げてリヨウタカを見るともうテレビに視線が移っていて、テレビ画面はニュースキャスターが二、三日前にあった逆ギレした生徒が教室の物を壊したという報道をしている所だった。

「もう一週間も経つのに。そろそろ報道されても良いんじゃないか」
大きく伸びをして腰の辺りを右拳で叩いたリヨウウタは老人くさく
見えた口喧嘩になるとやっかいなので黙っておく。

リヨウはゲームに顔を戻しながらリヨウウタが言った報道されても
良いことを思い出す。

一週間ほど前の夜に、リヨウが住む七世星町の大きな広場に一冊
の本が『墜落』してきた。落ちていたのではない。まるで流れ星の
ように光を帯びて落ちてきた一冊の本。リヨウの中学校までの道の
りがその広場は通るが本が墜落してきた翌日の朝には立ち入り禁止
と赤い文字で書かれた黄色いテープが広場のあちらこちらに伸ばさ
れていて、その中では警察官が蠢いていた。

カメラを持った人とリポーターの人もいて、もう放送されても良
い頃だと言うのに全く放送された気配は無かった。放送事項に引つ
かかるのか、迷信だと思われたのか分からないがクラスでは報道さ
れないままで終わるか放送されるかで賭け事をしている人も多い。
リヨウは報道されない方に賭けている。お弁当の卵焼き一つを。占
いや本当にあつた怖い話などのそのテの物をリヨウは一切信じてい
ない。喩え、占いが自分に良い方向へ向かったとしてもそれが本当
に起こらなければ占いとは言えない。案の定、一度も占いは当たっ
たことが無かった。

墜落してきた場面も見ていなければ、墜落した後も警察官とテ
プのせいで全く墜落後を見れていないからだ。

自分の目で確かめなければ信用しないリヨウの性格は良い意味で
用心深く、悪い意味でノリが悪かった。

「リヨウ」

「なに」

再び話しかけられた鬱陶しさにリヨウはイラだった声を上げた。
その瞬間、ゲームの中の主人公が倒れてピロピロとゲームオーバー
の表示が出る。ゲームの電源を切ると話しかけたのに黙り込むリヨ
ウタにリヨウはもう一度なに、と聞いた。

「……あの、さ。現代語訳辞典、お前ん所にない？」

「な……」

ない、と言おうとしてリヨウは言葉を継ぐんだ。金曜日の朝にリヨウタの所から持って来て授業で使ってそのまま机に入れっぱなしにしてしまっている。

「……教室にある。明日届けるから良いだろ」

兄嫌いなリヨウの不満な点は自分の通う中学校と、リヨウタが通う高校が隣にあるという点もある。とことん嫌っているわけではないのだけでも。

こういう場合は役に立つ点だが、リヨウタは残念と言った表情で体ごと向いてソファに上半身をソファから投げ出してぶら下がったような状態になる。

「宿題なんだよ」

「明日の朝やれば良いだろ」

「ホームルーム前に提出なんだけど」

「パソコン使えば良いだろ」

「インターネットに接続出来ないんだ」

サーバー側の都合で、と肩を竦める仕草をしたりリヨウタにリヨウは三白眼で睨む。もしもサーバー側の都合で無ければ今すぐ罵倒していた所だ。二台ある内のパソコンの一台を母と父が、もう一台をリヨウとリヨウタで使うはずだったのだがいつの間にかごく自然とリヨウタの部屋に持って行かれ、簡単には貸してくれないようになっていた。一度も手をつけていないのに壊されたらたまったものではない。

お下がりとしてパソコンだってくるのだから壊れていても困る。

「つまり？」

「とってこい」

笑顔で命令したりリヨウタにゲーム機を投げるとリヨウタはそれを受け取って、

「ゲームオーバーになるまでに帰って来いよ」

電源をつけながらそうニヤリと笑った。こつこつ上目線の　今
回は立場が不利だが、こんな時間に学校に行け、というのもおかし
いと思う。リョウが壁掛けの時計を恐る恐る見るともう夜の九時を
回っていた。ゲームボタンを押しながらリョウウタが追い打ちをかけ
るように言う。

「怖いのか？」

「行ってくるよ。うっさいな」

半ば自棄^{ヤケ}になりつつ椅子にかけてあったウインドブレーカーを着
てリビングから出ようとするとリョウウタがもう一言、と言わんばか
りに呼び止めた。

「コンビニで食つもん買ってきて」

これが狙いだと気づくのは自分の兄がまともに宿題をやっている
所を見たことが無いのを歩きながら思い出した時だった。

第一章 中

ウインドブレーカーのポケットの中を探ると小銭入れが出てきたので足りるように買えば良い、そう考えながらリヨウは歩き続ける。早歩きで。

先ほどまでは閑静な住宅街のために家々から光が漏れていたが、今リヨウが歩いている場所はその住宅街を抜けたコンクリートで固められたジョギングコースを歩いているために電灯の灯りしか無く、電灯も少ないために薄暗い。春と暦上では表記しつつも寒さはそれなりにあったので肌寒かった。ジョギングコースは広場の周りに取り付けられていてリヨウの通学路にもなっていた。つまり、広場を通るということだった。幽霊とかが出るという訳では無いが、本が墜落したというのは見ていないと信じないリヨウでも気にかかる。少し悩んでから、リヨウはジョギングコースから一旦外れて広場へと向かった。

広場と呼んでいる場所には木材で出来たアスレチックの横にはだだっ広い芝生が植えられている場所がある。その広い芝生の植えられている場所の丁度中心部分に本が墜落したのだった。もうテープもとられていて警官が立ち寄る回数も少なくなっていた。勿論、こんな夜にはいない。パトロールの警官はともかく。

リヨウはその中心部分に言つて腰を折つて目を良く凝らすと暗闇で分かりにくかったが明らかに人工的に埋められた土と芝生の草が混ざっていた。それ以外は別にコレと言ったものは無かったが。小さく溜息をつくるとリヨウは踵を返してジョギングコースに戻っていた。

広場を通り過ぎて国道に出るとコンビニが見えた。そこで、リヨウの願いを思い出すと同時にハメられたと分かつてリヨウは舌打ちする。帰りでも良い、とコンビニを過ぎてしばらく歩くと国道を外れた道に入りなだらかな坂を上り終わると敷地の問題で隣人関係

となつてしまつた高校と中学校が見えてきた。

七世星中学校と書いてある方の学校に入ろうとしたが、校門が閉ざされているのに気づいた。あいにくインターホンという画期的で豪勢な物はこの学校に取り付けられていない。怒られるの覚悟で校門をよじ登つて運動場に入るとどこから学校に入るか考える。

まるでスパイになつてゐるような探求心と不安が入り交じつてゐる表情を見せながら、一階の第一理科室の鍵が開いてゐるかもしれないのを思い出す。

幼なじみの坂野雛と一緒にになにか合つた時に入れるようにと鍵当番の時に開けておいた

場所だつた。他の鍵当番の人が毎度締めていつてしまつがヒナカリヨウが鍵当番の時は常にそこを開けておくようにする。そして運が良いことに今日はヒナ鍵当番で、鍵を開けつ放しにしておいてあつた。公務員が教師が閉めていないか、なによりもヒナがとちつていないかが不安だつたが行つてみることにした。

学校は山という文字で簡単に説明できる。山という文字の筆順二角目の線の一番端に理科室はある。

運動場を過ぎて点灯のついていない職員室を抜き足で通り、裏庭に回る。そして理科室の窓に近づいて鍵をかけておかないでおこつと約束した場所の窓を引いてみるとカラカラと少々喧しい音を立てて開いた。

思わずガツポーズをしながらもたかだ現代語訳辞典のために此処までしなくはいけないのか分からなくなる。リヨウタの目的はこれではないというのに。

山という文字で表してリヨウの教室、二年五組は理科室のおよそ真上、つまりは二階にあつた。

窓から学校に忍び込むと二階の階段を目指して歩く。勿論抜き足で、早々と。理科室を出て正面に階段があるのでそこから行けばすぐに二階へ行ける。階段を上れば二年七組の教室が見えて、後は五組に行くだけだつた。階段を上りきる。

そこで、リヨウの足はとまった。

「……っ！」

両手で口を塞いで息を押し殺す。思わず声を出しそうになっ
てしまった原因はリヨウのクラス、二年五組にあった。

青白い光が開きっぱなしの扉から溢れ出ている。蛍光灯の明かり
でも月明かりの光でもない。それだったらなんなのだろう。

急に光は無くなり、蛍光灯の光が素早くついていった。五組の教
室だけが。もう先生に怒られても仕方がない、と意を決して足を
踏み出す。重りをつけたように重かったがひきずりつつ教室に入り
リヨウは目を疑った。

「……え」

そこには新米担任教師でも生徒でも普通の教師でもない。青色と
水色が強調されている洋服を着たリヨウと年齢が同じくらいの少女
が、教卓に立っていた。

何処の学校の制服か分からない。制服ではなく洋服と考えた方が
早いだろう。はしたないにも関わらず教卓に立ち、降りようとしま
い少女はゆっくりとリヨウを見た。リヨウは一步後ずさりをするが、
蛇に睨まれた蛙状態でもうそれ以上は動けなかった。

「おまつ……お前、誰だよ。なんでこんな所にいるんだよっ」

「地球生命体を発見。地球に無事到着完了」

リヨウの質問に無視し淡々と平坦な声でそう少女は言った。透き
通った透明な声音だった。しばらく少女はリヨウをみつめた。

「なん、だよ」

低い声を出したつもりだったが上ずってつい高い声を出してしま
いリヨウは羞恥心で頬を赤く染める。ミニスカートを呼べる短いス
カートを翻して教卓から飛び降りると、リヨウに近づいて頬に触っ
た。

「キサラギスタカ」

「は、え？ なんてお前名前してんだよ」

ぎこちなく言うリヨウの視線は少女のなめらかな白い手にいつて

いて、頬に当てられているその体温のないかのような冷たさに硬直していた。白く、雪のような肌とそこに水滴を垂らしたような水色の瞳。蒼い髪は腰まで伸びていて、その容姿は可愛い領域ではなく美しいと言えた。

「……地球保安部が欲している人物。そして、私が見つければならない人物。惑星探し人キサラギスタカ」

目をテンにして少女を見ると目があった。リヨウはすぐに顔を逸らしてなり始めた鼓動を抑えるように右手で洋服を握った。

少女がリヨウの握り拳に手を取る。ゆっくりと拳を解放させて腕を伸ばした。その間リヨウはされるがままでありオーバーヒート寸前の脳ではこの事態についていけなくなっていた。

「……いつ」

思わず声を出してしまい歯を食いしばって耐える。少女はリヨウの右腕、詳しくは肩から手の甲にかけて細く白い指を滑らせた。……それだけだった。

しかし、リヨウの右腕にはあからさまな変化が起こっていた。ウインドブレーカーを限界までまくって中のシャツも一緒に巻いて、リヨウが腕を見る。

九つの輪。一本の赤い線で大小様々な輪が繋がれている。その中の手の甲に描かれている一番小さな輪の色だけが水色になっていた。いや、それだけではない。水色の輪よりは大きいが他と比べれば大きくない輪には青色と白色の地球に似たような色がつけられていた。水色の輪から数えて三番目の輪だった。

「なに、したんだよ！ いきなり現れていきなり変なことしやがって！」

「……来る」

「聞けよ。人の話を」

又もリヨウを無視して発した少女に吹っ切れたリヨウが掴みかかろうとした刹那、爆音と爆風に巻き込まれて机が奥に吹っ飛んだ。

「……あ、なにが」

自分になんの損傷もなかった。捲ったままの右手を少女に握られていて、周りを見ればとても色素の薄い青色のドームのようなものに包まれていた。右手は宙に差し出している。左手で握られていた。おそらくドーム状のものがリヨウと少女を守っていたのだらう。

「シールド展開の機動が遅かったら貴方は死んでいた」

冷淡にそう告げた少女にリヨウはありがとう、と素直にお礼を言った。状況について行けずに反射的に出てきた言葉であり、リヨウの視線も泳ぎ、状況を全くと言っても良いほど把握できずにいる。

黒板を見れば大きく穴が空いていて、緑色の壁なんてない。そして、次の教室、二年六組が見えていなかった。黒いねじれのようなものが発生している。

「来る！ キサラギスズカカの保護シールド展開及びブレードの転送を開始」

青いドームに包まれてリヨウは呆然と一歩前に出た少女を見詰めた。少女が高らかに右腕を上げると右腕の真上に粒子のような青い光が生まれて固まりゆく。

「ブレード転送者名は水ノ零」

名乗り上げた瞬間、右手にはレイと同じ背丈くらいの太い剣を持つていて、それと同時に 黒板の両端を掴んで狭いところから出てきた人のように人型の黒い巨大な怪物が出てきた。

第一章 中（後書き）

プロローグと第一章 前の細かな部分にふりがなをつけさせて頂
きました。

第一章 後

「なんだよあれ」

声に出さずはいられまい。この地球という惑星には存在しない黒い巨大な怪物が目の中の少女を睨み合っているのだから。思わず頬をつねると痛みが走り、夢じゃないことを痛感する。

怪物が背を伸ばすとばらばらと天井を突き抜けてレイを見下ろしているようになっていて、中学生の体躯にしては少し小さめの体であり、その大きさは歴然としていた。

今は半壊で止まっているがこの体躯ならば全壊せざるを得ない全壊させた。ますます大きくなって校舎が小さく見える。黒い怪物の大きさは腰が校舎という大きさとなっていた。

空が見えて、満天の星空は、見えない。黒いねじれた線がうねうねと漂っているだけだ。ブラックホールを思わせるその黒い空間にリョウは閉じこめられてしまった。

「ブラックドームの展開要請の受理。発動した」

レイはそう言ってから大剣を握って飛びかかった。

「水属性付加の補助を要求」

そうレイが告げると大剣に水が帯びた。大きな水滴を床にまきながらレイは突っ込み黒い物体の足を斬り裂いた。がっくりとゆったりした動作で怪物が斬られた方の足を庇うように膝を折る。校舎を壊しながら。

怪物は拳を作ってレイに向かって拳を振り上げる。シールド展開と再び言うどドームがレイを包んだ。拳を跳ね返しその反動で怪物は尻もちをついた。もやはや校舎はコンクリートなどの破片となっていた。リョウは腰を抜かして時々ドームにぶつかってくる校舎の破片に一々首を竦めていた。怖いという感情よりもおかしいという感情が勝っていた。唱えれば次々を出てくる物。黒い怪物。歪んだような空間。地球には、いやこの世界ではありえないものばかりだ

った。目を疑うがそれはどう見ても本当のことである。

「空間廃棄物除去を要請。決める」

剣を大きく振りかざしてレイは呟いた。そのまま怪物につっこむと大きく飛躍して肩に上ると怪物は暴れ出す。怪物の右手がレイを襲おうとするとレイはすぐさまに振りかざしてあつた剣で右手を斬った。獣の咆吼のような叫び声を上げて怪物は暴れに暴れた。

「なんで、なんでだよ。わっけわかんねえ」

崩壊した校舎や咆吼する怪物。それなのに、人は誰も来なかった。いや、今この黒い空間にあるのは校舎と怪物、そしてリヨウとレイだけだった。家やコンビニなんてものは無い。只黒い場所に全壊した校舎があるだけだ。

「……怪物自体は弱い。発動した人物が不慣れ」

冷淡に、なんの感情も浮かべないで、レイは怪物の首を横切りに斬った。黒い粒子が飛び交い、さらさらと生ぬるい風に乗って消えていった。

リヨウを包んでいたドーム型のシールドが消えて、その瞬間に教室は元に戻った。全壊していない。だが、教室のガラスは全て割れており机は後ろのロッカーへと積まれていた。

もしかしたら呆気なかったのかもしれない。たつたの三発で怪物は倒れてしまったのだ。それともレイという少女が強いのか。今のリヨウの頭ではなにも考えることは出来なかった。只、恐怖という感覚が背筋を伝う。彼女は守ってくれていたのかもしれないが、リヨウには彼女の冷淡な表情を見る度に恐怖が生まれてくる。

「キサラギスタカ。貴方は選ばれた」

レイはリヨウの方へと歩いてきた。リヨウはその分腰を抜かしたままだったので手で体を動かしながら後ずさりして逃れようとする。「なに、が」

「惑星探し人に」

レイが一步近づき、リヨウは一步分下がる。不意に堅い物が背中に当たり、それは机だった。積み重ねられている机に背中があたり逃げ道

がなくなってしまうた。

「変なマークつけるわ訳分かんないこと口走るわなんだよお前！」

せっぱ詰まった表情でリヨウが叫んだ刹那、机の山が大きく揺れて大量の机がリヨウの頭の上から落ちてきた。ゆっくりとレイが瞳を細めた。冷たい平坦な表情は変わらない。

そこで、リヨウの意識はぷつりと途切れた。

第一章 後（後書き）

……面白くない。第二章からが本番です。……自信ありませんが。

第二章 前

白くて柔らかい暖かみがあるのは布団しかない。布団、つまりは家ということできさつきほどまでであったように感じる出来事は夢

リヨウにとつては悪夢。だったということでも考えても良い。のだが、リヨウには体の違和感を感じた。体のそこら中が痛んで、全身筋肉痛に襲われていた。リヨウのベットは窓際に置いてあり、すぐに景色を見られるのだが今はカーテンが閉まっていた。開く気もしないようなけだるさと痛みが体に走った。

どこから夢なのか分からない。兄のリヨウタに現代語訳辞典を学校にとつてくるように命じられたもつと前から夢なのか。そんなことを考えている内にただいま、と言う声が一階から聞こえてきた。リヨウタの声だ。

段々足音が大きくなり、隣の自分の部屋に入るかと思ったらリヨウの部屋のドアを小さく開けて覗いてきた。

「起きた？」

「朝帰りかよ。彼女といちゃいちゃしてたのか」

クツクツクと喉を震わせて笑ったリヨウにリヨウタが見せた表情はあからさまに眉間に皺を寄せた怪訝な表情だった。部屋にリヨウタが入つてくるとリヨウはあからさまに嫌な顔をしたが怪訝な表情を崩さずにリヨウタはリヨウの勉強机とセットになっている椅子を引いて座った。

「それが出来ればどれほど嬉しいことかね」

肩を竦めて首を振ったリヨウタはだがな、と付け足した。

「朝じゃない。もう夕方だ」

「はあ？ え、じゃあ俺、学校は？」

「休んでるけど」

当たり前だろう、とリヨウタが言つとリヨウは夢の見過ぎだと思つた。確かに長い夢だったが、何故リヨウタや両親は起こしてくれ

なかったのだろうか。

「え、なんで起こしてくれな」

「ストップ。スタカ。お前さ、昨日あったこと覚えてない？ てゆうか、今何曜日分かる？」

リヨウの言葉を遮って手の平を突きつけてはあ、と溜息を一つ吐いたリヨウタに今度はリヨウが訝しげな表情を見せた。

「ええっと、土曜日はぐうたら過ごして、日曜日は……あれ。今日って日曜日だよな。学校なんてないんだよな」

「スタカ」

膝に肘をつけて両手の指をからませてその上に額を乗せたりヨウタは冷たくリヨウの名前を呼んだ。訳も分からずにリヨウはなんだよ、と答える。顔を上げてリヨウタが再度確かめる。呆れたような心配そうな顔を見せていた。

「お前、日曜日にあったことを夢だと思って居るんだろう」

「え、兄貴に現代語訳辞典を取りに行かされた……っていう？」

リヨウはあえてそこまでしか言わないようにした。学校であったことは言わないようにする。リヨウタに精神科へ連れて行かれかねないからだ。黒い怪物に遭遇して変な美少女に会って……。そんなことは言えまい。

「そうだ。そしてお前は、散乱した机や割れたガラス、半壊したお前のクラスでぶっ倒れていたんだよ」

「……はい？」

リヨウタが椅子から腰を上げてベットに近づく。カーテンをリヨウタが開くと橙色の光が部屋を差してリヨウタの顔が橙色に染まった。夕日が顔を半分残している状態だった。

「今は、月曜日の午後五時。日曜日の夜にお前は学校でぶっ倒れていて、朝来た先生に見つけられて家に担ぎ込まれたの。……まあ、その前に俺んとこに来てごちゃごちゃ言われたけど」

「……てことは、あれは正夢」

信じられないという表情を見せたリヨウにそりゃそうだよな、と

倒れていたことと解釈し、間違ったことに同意した。

「が、学校はどうなつてだよ」

「……普段通りだよ」

「いや、じゃなくて！ ぶっ壊れてなかった」

リヨウが慌てて聞くとリヨウタの手の平が押しつけられるように額に当たってその後大声で笑い声を上げた。

「おまつ……馬鹿か？ もの凄い夢見たな。んなわけないだろ。学校がそう簡単に壊れるかよ」

正夢な訳ないって、と腹を押さえて笑うリヨウタを殴りたくなくなつたがそのために作った拳を掛け布団の中で抑える。

それでは、あの水ノ零という少女も黒い怪物もいなくて、元からそんなことは無かつたのだろうか。只、机に自分が当たってその反動で気を失つただけだったのか。

違う。

リヨウは殴るために作った拳をリヨウタにはれぬように見ると手の甲に丸い輪と一本の赤い線。紛れもなくそれは、水ノ零につけられたものだった。

目尻に浮かぶ涙を人差し指の甲で拭つたりリヨウタがリヨウの肩に手を置いた。リヨウは嫌悪の表情を見せる。そして払いのけた。

「まあ、良かったよ。明日は学校に行けるな。ヒナちゃんも心配してたし」

「まさか」

払いのけられた手を振りながらリヨウタが笑う。まさかのまさかさ、と言う言葉を残して踵を返して去つていった。

リヨウは腕組みをして その前に右腕の袖を捲る。大小様々な九つの輪と一本に繋がる赤い線。

彼女の冷淡な表情と弱すぎる黒い怪物。彼女がそつと小さく呟いた言葉は召喚した人物が不慣れ。そして、彼女は自分のことを『惑星探し人』と呼んだ。鮮明に出てくるあの時の光景。せっぱ詰まっていたはずなのに彼女がどのように戦つて、自分を見ていたのが瞳

えおビデオカメラとるように見えてくる。

考えても無意味だと、水に流そうとする。ドツと疲労感が体全体に浸透して布団にずぶずぶと入り込んでゆく。そのまま、眠りについてしまっていた。

結論を言えば、やはりキサラギスタカは彼女に会い、黒い怪物を目の当たりにしていた。

第二章 前（後書き）

やっとだよ。これからだだだだだだっ！

第二章 中

昨日はそのまま寝てしまい、朝まで起きられなかった。悪夢にうなされることもなく、すんなりと学校へ登校することにする。リヨウタと一緒に行くこうと誘われたが丁重に断った。

水ノ零は何処へ行ったか。車の風が短い髪を揺らしていく中、リヨウは考えた。少女漫画風に考えれば前に会った美少年及び美少女が転校してきて主人公を驚かせるというのが基本的なシチュエーションであり、そう来ると予感していた。

しかし、リヨウの周りに少女漫画なんて読む女子は居なく、リヨウ自身も家族も読まない。少女漫画が本当にそういうものなのかリヨウ自身分らない。自分の独断と偏見で少女漫画がこういうものだと思いこんでいた。

同年代のように見えたし、万が一高校生だったとしてもリヨウタに聞けば分かると思える。小学生……とは思えないのであえて外しておいたがもしそうだったら従兄弟にでも聞けばいい。そう考えながら歩いていると後ろからどつかれた。

「よっすっ。なんだよお前、昨日休んだじゃん？ 弱いな。このそうめんめーっ」

肩に肘を乗つけて寄りかかってきた人物は可愛らしいと評判の中学の制服を全く着こなしていない、というか似合わないと一目見たら誰もが思う。リヨウは露骨に嫌な表情を見せた。なるべく顔を背ける。

「……重い」

「ひっよわっ。オレの体重が乗ったぐらいで重い言うなよなー。この清涼飲料水めえっ！」

肘で頬をつつきながらケラケラと笑ったのはキサラギズスタカにリヨウというあだ名をつけた張本人の榎本雛^{エノモトヒナ}だった。リヨウの幼なじみであり、同じ陸上部の短距離種目エース。リヨウは短距離と走

り高跳びの掛け持ちであり、それを理由にしなくともヒナはリヨウよりも速かった。

「清涼飲料水言うな。大体、お前の発想はいつも馬鹿げてるんだよ。勉強しろ勉強」

「いーじゃん。みんな良いって言うてくれてるんだからさ。それにもの凄いあだ名じゃん！ これほど素晴らしいあだ名はオレにしかなかったらないって」

たまたま陸上の大会で清涼飲料水を飲んでいたヒナが咄嗟に思いついた、たまたま思いついたあだ名をつけられた側はそんな満足げに笑うエースを殴りたくなった。女の子だから、というのは差別であり、喻えヒナが女であっても男子を打ち負かすほどの力があるのだから殴っても平気だとは思ったが、この前ヒナを激怒させて血の乱舞を見せてくれた男子が脳裏に浮かんだのでやめておいた。きつとヒナならキングゴリラでも恐竜でも打ち負かすだろう。

「おお。そう言えばさ、お前なに？ テレビに影響される方な訳っ？」

リヨウがヒナを睨み付けたからか逃げるように話題を変えたヒナは月曜日　リヨウから言えば日曜日な訳だが。に教室で倒れていた話だよ、と少し驚いた顔を見せた。クラスではそれは四、五日前に起こった何処かの生徒が教室で暴れ回ったのに影響されてリヨウがこんな行動をしたという噂になっているらしい。

「……別に。教室をさんじらかしにしたのは俺じゃないから」

「じゃあ誰だよ」

「……知らん」

それは宇宙人のせいだ、と言ってもヒナは大いに笑って背中を叩かれるだろうとリヨウは口を閉ざす。右手の甲を横目で見た。包帯を巻いて、甲に描かれている赤い線を輪を隠している。リヨウが苦みを潰した顔で手の甲を見ているとヒナが目ざとく甲の包帯を見つけた。

「何お前これっ！ やっぱ昨日暴れたんだろっ」

「違つて。大体、俺が教室でどうして暴れなきゃならないんだ」
「だから影響されてるんだって」

手を掴もうとするヒナの追撃にリヨウが手を払いのけて避ける。違つて、と何度も言うがヒナは一向にそれを信じようとはしなかった。右手首を掴まえられてリヨウのこめかみには冷や汗が伝った。あの摩訶不思議な模様を見られてしまう。ヒナの手がリヨウの手の甲に触れる。

「ひゅー。お二人さんあつさからあつたねえ」

ヒナもリヨウも咄嗟に約一メートルほどの距離感を保つ。そして同じクラスの桜庭サクラバが後ろからどついて冷やかそうとしていたのでリヨウとヒナは同時に鉄拳を喰らわしてやった。

サクラバの冷やかしてリヨウはヒナの追撃を避けられた。リヨウが安堵の溜息を吐いた。手の甲をさすったときにヒナは不思議そうな表情で手の甲を見ていた。なにかを思い出しそうな考えているのを思わせる瞳で。

ゆるやかな坂を鼻を押さえて上るサクラバとヒナと一緒に上りながらリヨウは二人に質問する。

「なあ、学校壊れてなかったか？　もしくは転校生とか来る噂は無いのか？」

先頭を歩いていたヒナとサクラバは悪い物を食べたのかと怪訝な表情で振り向いた。それからリヨウタのように吹き出して大笑いする。ヒナは一度真剣な顔をしてリヨウの肩を掴み、すぐに又吹き出してリヨウの背中をバンバンと力強く叩いて腹を押さえて笑った。

「おいおい。まだお前熱あるんじゃないのっ」

「大丈夫かよ。学校なんてそうそう壊れるわけないし。壊れたら万々歳！　てゆうか、俺の情報の中に今のところ転校生が来るなんて言う情報は一切無い！」

自信満々にそう言い切つて笑いながらサクラバは言うが誰もサクラバの情報を聞こうとも信じようとも買おうともしない。もっとマシな情報屋だっているからだ。

学校が壊れたら夏休みや冬休みを潰してまで授業を受けなくてはならないのにそのようなことを分かっていないサクラバに教えてやるうと思っただが大笑いしている二人がシャクに来たのでリヨウは黙り込んで俯いた。

昨日もやられた額に手の平を押しつけられる行為をされたのでそれをやった人間が誰だか見ると心配そうな表情をしたヒナだった。リヨウの視線に気づいたのか驚いて顔を赤く染めるとリヨウの額を叩いた。バチリといい音がする。

「いつて」

「熱なんてないから大丈夫だろつ。行くぞサクラバ」

まるで下僕扱い、犬扱いのようにサクラバの首根っこを掴んで坂を上るヒナをリヨウは訳の分からぬ表情で額をさすりながらついていった。

坂をのぼり終わると何処も壊れていない中学校校舎が見えてきてあの出来事が夢だと思いたかったがリヨウは首を振って現実逃避をするのをやめようと思った。普段通りに学生服を着た生徒が吸い込まれるように校舎に入ってゆく。

「なあ、本当に大丈夫かよ」

「平気だ」

しつこいとも言える心遣いがあるサクラバが不安げな表情を見せたのでリヨウは小さく頷いてそう答えた。

山の字の横線が校舎の入り口をなっている。二年生が一番端、二画目の所に玄関がある。

玄関に入って下駄箱に靴をしまつて上履きに履き替えて、普段通りにまっすぐ行き、角にある階段を上ろうと久しぶりに思える上履きの感触を踏み締めようとしたときに、リヨウは停止した。体も、精神も。

急に立ち止まったりリヨウをサクラバが再び不安げな表情をした振り向き、よそ見をしてリヨウの後ろにいたヒナは背中に額をぶつけた。

「いってー。なんだよいきなり」

ヒナの憤怒した声を無視してリヨウは下駄箱にかじりつく。リヨウの視線の前のネームにはあり得ない人物の名前が書いてあった。

ミズグチレイ
水口零。

第二章 中（後書き）

ヒナとサクラバの台詞表現が使いこなせません。うわ。どうすんだ
ろう。

第二章 後

「お前、やっぱりさっきからおかしいぜ？」

下駄箱にかじりつくリヨウにヒナが両手を組んで貧乏揺すりをはじめ。明らかに苛立ちを含んだ空気を醸し出していた。

「なあ、ミスグチレイなんて居たっけ」

二人はもう呆れを通り越した啞然とした表情で振り向いたリヨウを出迎えた。笑う気も失ったらしく二人で顔を見合わせている。

「……罰ゲームでお前がミスグチレイに声かけて無視され続けているの覚えてないのかよ」「なんかもうお前帰った方が良いんじゃないの」

二人で一緒に発し、肩を竦めて溜息をつくと行こう、とリヨウの肩を二人で叩いて押して連れて行こうとする。

「お前からこそ違うんじゃないのか。これはやっぱり夢なんじゃないのか。早くこんな悪夢から覚まさせてくれ！」

「はいはいはい。大丈夫ですかー。清涼飲料水でも飲んで目え覚ましなー」

「夢じゃないけどな」

ヒナとサクラバが双方から頬を抓ってリヨウが歩くのを促す。痛みを感じてこれも現実だということを感じた。現実逃避をしないと誓ったのは何時か思い出すと少し前に誓ったばかりだったので溜息をついた。現実逃避なんてできっこないがしてみるものも試しだという甘い考えははかなくすぐに壊された。

「ミスグチレイ……転校してきた訳じゃないんだよな。元からいたんだよな。いや、いなかったはずだけだな」

「なーにブツクサ言ってるんだよ。お前はそれでも男か、このそうめん」

今のお前の方が十分男だよ、というヒナへ向けた言葉をなんとかのど元で抑えると両頬をさすって、

「なあ、お前らは宇宙人が教室にいたら、どう？　なんかこう……
驚いたりしないか？」　限界だ、とサクラバがリヨウの真剣な顔を見て、ヒナもリヨウの顔を見てから大のつく大きな声で笑い始めた。そのままリヨウの背中を二人で叩く。一昨日の出来事の痛みがぶり返してくるようだった。

そうとも知るわけのないサクラバとヒナはリヨウを置いて階段を駆け抜ける。待てれば、とリヨウが追いかけるとサクラバが五組の教室ではなく、二年の教室は七組まであるのだが。七組の隣の空き教室の扉の前で中を指さしていた。

「おいだから、もしものことだって」

サクラバの肩をリヨウの手が掴んだとき、サクラバはあらん限りの声でリヨウの言葉を遮って言った。

「おい！　リヨウがミズグチレイは宇宙人だってさ！」

騒がしかった教室が一度白けたように静まった後、ドツと笑い声が教室中に響いた。野次馬のように七組や六組からちらほらと扉から覗いてくる生徒もいる。

頬が抓られた何倍もの赤さで染まるのが分かった。つられるように爆笑しているサクラバとヒナをどかすとサクラバが指を指している方向を見る。

一番後ろの窓側、一番端の席に水色の髪をした生徒がいた。人形のように動かずに座っている。自分が笑いの元となっているのにサクラバを見ようとも、クラスも見ようともしていなかった。

リヨウは笑いながら集まってくる主に男子生徒の肩を押しつけてミズグチレイに近づく。レイはゆっくりとリヨウを見て、冷やかしの言葉と器用な手笛の音が聞こえてきた。しかし、今のリヨウの耳には全く入ってこない。

只、昨日会った水ノ零と今日の前にいる全く同じと言える人物、ミズグチレイしか意識にも視界にも入っていないかった。

「お前、なんているんだよ」

「……それが与えられた使命だから」

冷淡で透明な声音でレイがそう答えると冷やかしゃ手笛、笑い声がびたりと綺麗にやんだ。のっぺりとした紙を只貼り付けたような無表情はミズノレイと全く同じであり、透明な声音もミズノレイのものであった。

「転校してきたのか」

「私はこの二年五組の生徒であり、元からいた『こと』になっている。転校してきたのではない。私は入学した時から存在した『こと』になっている」

「お前、一体なんなんだよ。俺が知ってるクラスにお前は存在しない」

「だから、私は今は存在する『こと』になっている。キサラギスズタカの言っているクラスは一昨日のクラスとここであり、昨日からは私がこのクラスに存在することになっているクラスに貴方はいる」

そこでリヨウは吹っ切れた。訳の分からぬ言葉を発すレイとそれが分からない自分の不甲斐なさと苛立ちが生まれていた。クラスの生徒は訳の分からぬ顔でレイとリヨウに視線を注いでいた。レイの机を思い切り叩いてリヨウは怒鳴った。

「出て行け！ お前は此処に存在しないんだ。お前のいるべき所は此処じゃない！」

荒く息を取り入れるリヨウの動揺で揺れている瞳をレイはひとしきり見つめた後に幽霊のようにすうつと立つと出口に向かって歩き出した。自然に生徒が道を開くように左右に分かれる。

出口で厳しい表情でレイを見るヒナといけないことをやってしまった子供のようにまずい表情をしているサクラバの間でレイはゆくりとリヨウに向かって手招きをした。

「来て」

淡々とした短な言葉を残してレイは三階へと続く階段を上り始め

た。

リヨウは、呆然とした後にゆっくりとした足取りでレイの後を歩いていった。その際に誰からも声をかけられなかった。出口でヒナが声をかけようとしたのか、リヨウの肩に手を伸ばしたが躊躇しやめて、俯いた。

何故、ミズノレイがミズグチレイをしてこの学校に存在し、一昨日の出来事が一体なんなのか。

リヨウは綺麗な清水が流れる滝を思わせる水色の髪が、その髪を持つ少女が自分の前から消えぬように一度見てから包帯を巻いた手の甲を凝視した。

この模様は一体なんなのか。

それらを確かめるためにミズノレイ及びミズグチレイの後をついていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9694c/>

power of school!!

2011年1月1日02時13分発行